東大津高校新聞

瀬田を制する者は近江を制す

～東大津は滋賀の中心だった～

埋蔵文化財センターで堀真人さん（51）に瀬田丘陵の歴史についてお話を伺った。我々東大津高校生が通う瀬田丘陵は、飛鳥～奈良時代にかけ盛んに開発され、近江国の中心地となった場所だ。

工業で栄えた近江の「心臓」

陸路と水路が交わる地点として栄えていた瀬田丘陵。この場所には現在の県庁に当たる近江国庁が置かれ多くの人々が生活し、土器や鉄製品が作られていた。交通の便がよく木材や製品の搬入・搬出が楽で、炉や土器の原材料の粘土も多くこの土地では取れていた。そして、古代のコンビナートともいわれる製鉄所があったことも発見されている。丘陵西側には近江国庁跡が発見され、国庁付近にも多くの建物跡が発見されている。国庁の中心である政庁からは雲が流れるような模様が施された瓦が発見された。この模様は「飛雲紋」と呼ばれ、近江国庁の様々な瓦に用いられている。

近江国内では資源を確保し需要にこたえることで国力を示していた。しかし、急激な木の伐採などにより大雨のたびに土砂崩れが多発していた。現在でも山肌がむき出しの部分が残っている。一度崩壊した自然を取り戻すのは容易でないことがわかる。

▲飛雲紋の施された瓦

▲実物を間近で観察

実体験が歴史を知るカギ

堀さんは「今回聞いたことを忘れず、大人になったときまた訪れてほしい。そして、これからも自分の好きな視点から歴史の学びを深めていくことが大切だ」と話して下さった。

現在でも近江国庁跡や山ノ神遺跡などは復元されており当時の様子を知ることができるためぜひ訪れてみてほしい。

▲取材に対応する堀さん（右）

破片を探して直して

～バックヤード見学～

バックヤードでは発掘した遺物の保管やその調査をしているそうだ。作業場では、真剣な表情で埋蔵文化財センターの方々が修復作業をしていた。

丘陵から発掘された土器などは製造過程で割れてしまい捨てられたものなどが多く、その破片が全て見つかることも少ない。だからこそ、修復作業にはとても集中力が必要になると堀さんは真剣な表情で語って下さった。特に貝塚や製造所跡にまとめて捨てられたものならいいが、川などに捨てられたものは破片が広い範囲に散っているので復元作業に苦労するそうだ。

堀さんは、アルバイトやボランティアで実際に発掘現場で発掘ができると教えてくれた。資格がなくても参加することができるので、経験を積むのにはもってこいなのだそうだ。

▲出土品を図面に起こす様子

▲独特な雰囲気が漂う保存庫

埋蔵文化財センター

開館時間
9時00分～17時00分
（入場は16時30分まで）

休館日
土日・祝日・年末年始

入場料　無料